

親や先生へのアプローチ

Q.

行動がゆっくりで同年齢児が1回でやりおえる課題も3回かかってやっとやれる幼稚園児、自傷行為が続く中学生、身の回りの支度などすべて母親任せの高校生。いずれも気になる子どもばかりです。発達の問題もあるのかと考えますが、どの子どもも母親や家庭環境の問題がとても大きいのではと思えてなりません。

こんな場合は、親に対しでどこまで踏み込むことができるでしょうか。親が変わらないと、子どもも変わらないと思います。親へのアプローチのむつかしさを感じています。

A.

私たちは、どんな何が起こっているのか、そして今どのように対応されているのかを、親に対して丁寧にお尋ねしていくことから始めます。いきなり問題を解決するための答えを求める前に、現状で親がされている対応を尋ねたり、それについてどのように考えているかの問いかけから始めます。そして親が現状でなさっておられる工夫や努力を確認します。その上で、親の困り感に焦点を当てていきます。その親子の現状をABCの枠組みで、整理していくと同時に親のアイデアを引き出すようにともに考えていきます。現状の大変さをねぎらいながら、新しい対応を提案し変化を実感していただくことで、ゆっくりと親の心も動き始めるように感じています。

子どもへの対応がうまくいかず、困っておられる親が、自分の行動(気づいたことを話す)にちゃんと対応してもらえる経験を得ることで、親の気づきはますます増え、子どもに対する対応もだんだんとよくなっていくことが期待されます。

とても地道で、遠回りのようにみえますが、親へのアプローチとして役立つことを願っています。

Q.

“暴れる子”というイメージを持っている先生に対して SC としてどう伝えるとよいでしょうか。

A.

“暴れる子”としてその子を捉えるのではなく、「かんしゃくを起こす」「泣き叫ぶ」「ものをたたく」などできるだけ、具体的な行動としてとらえます。いろんな状況下で、その子の行動は様々に違うことを丁寧にお伝えし、どんな場面で「暴れる」のかを明確にしながら、話し合うといいと思います。きっかけが何なのか、暴れた後に何が起こっているのか、またどういうときに暴れないのかをしっかりと見て、それぞれに対応していくことの大切さも伝えていきたいです。先生は、自分一人で対応できずに困っているのかもしれませんが。たとえば、観察をするにしても先生にお願いするのではなく、SC として観察した結果を伝えていくことや役割分担して一緒に観察していくことも必要かもしれません。

SC という立場では、直接児童生徒と接することが難しかったり、教室場面が限定されてしまう場合もありますね。そういった時には、記録してもらいたいポイントを知らせて、行動記録を残してもらう方法が有効です。